

## 製材用国産原木の地区間交流

専門研究員 佐々木 孝 昭

### 要 旨

- 1 県内製材用素材需要量に占める外材の比率が昭和50年には35%に達し、国産針葉樹の需要量が減少している。
- 2 地区別に製材用外材需要量をみると各地区とも比率が高くなっており、50年においては12地区中9地区が外材比率30%をこし、国産材比率70%以上の地区は3地区である。
- 3 外材比率の高まっている地区は国産材製材地区のうち相対的に供給量が著しく少ない地区、原木需要の盛んな地区、外材輸入港に近接している地区である。
- 4 国産製材原木は地区内の需給がひっ迫していても地区内から供給される原木の全てが地区内に供給されることはなく、地区外にも供給され、不足分を近隣地区からの供給によっている。
- 5 ある地区に対する原木供給地区は基幹、補完、限界の3つの型に区分される。

### 1 はじめに

製材用原木は木材の生産・流通の主要部分をしめている。昭和50年の本県の素材需要量240万 $m^3$ の55%が製材用材であり、また、人工造林の目的の大部分が製材用材の造成にある。全国的な外材市場化傾向のなかで国産材の主要な産地である本県でも外材の比率がしだいに高くなってきており国産材の需要量の停滞、価格の低迷傾向が強くなってきている。

一方、国産材の流通についてみると外材による市場支配のもとで需要側である製材工場では自らの経営にあった原木を選択的に確保する意向が強まりつつあるために、道路やトラックの輸送手段の発達によって原木の交流圏は広がりつつある。輸送費は原木の供給・需要の両者に負担となり、生産費の上昇となってあらわれて外材との競合においてはマイナス要因となる。

本報では県内で消費される製材用原木の需給が地区間でどのような交流が行われているか検討する。

### 2 方 法

県内の国産材主体の原木需要を行っている製材工場が県内のどの地区から国産製材原木の需要を行っているか昭和49年、50年について調査し、国産原木の地区間の交流状況をみた。

地区別の需要量を県全体に対する比率で示したが、現実の農林事務所別需要量と比べると盛岡地区で過大、二戸地区で過少となっている。これは調査方法が抽出によるためである。地区の区分の仕方が調査方法の制約により農林事務所管轄区と一致していない（久慈地区に軽米町と九戸村、水沢地区に江刺農林事務所管内が含まれている）のでこれらの欠点については今後修正する必要がある。

### 3 結 果

#### (1) 原木需要

昭和40年、45年、50年の地区別の製材用原木需要の特徴をあげると、外材の増大に伴う国産針葉樹材の減少、地区間で需要量の格差が増大していることに要約できる。

最初に外材の増大と国産材の減少についてその推移をみると、昭和50年の県内製材工場の外材需要比率は35%で、昭和40年の5%に比べ著しく外材に依存する度合を強めている。昭和40年には県内全域が国産材を原木とする国産材製材産地であったが、昭和40年代の前半に県内とその周辺に港湾整備による外材輸入港が開設されて外材需要が増大する。外材の増加は地区によって差がある。地区別の外材の増加率をみると、40年から45年の期間では、国産針葉樹の需要地帯であった水沢、江刺、一関、千厩、大船渡の各地と外材輸入港のある宮古、需要量が県内で最大の地区グループに属する盛岡において13~38%の増加がみられた。逆に、増加率が10%未満の地区は二戸、久慈、遠野、花巻、北上であり、前述の国産材地区に比べて国産針葉樹の比率の低い地区である。45年から50年の期間では40~45年の期間に高い増加率を示した地区のうち千厩、大船渡を除く地区と新たに北上、久慈、花巻、遠野の地区が増加率10%の地区となっている。この結果、50年には製材用原木需要量のうち国産材の比率が70%以上を占める国産材製材地区は千厩、二戸、遠野の3地区だけとなり、多くの地区では外材への依存度を高めている。

つぎに地区別の原木需要量の40年から50年の推移をみると、県全体の需要量は15万 $m^3$ 増加している。地区別にみると、需要の増加している地区は大船渡、宮古、北上の外材が増加している地区と二戸地区で、逆に減少地区は外材需要が50%をこしている一関地区となっている。他の地区は多少の増減はあるが停滞的である。

#### (2) 国産原木の地区内需給

地区内から供給される原木を地区内の需要に向けた場合に需要量に対して供給量が大きく不足する北上、一関、岩泉の地区のほかは大部分自給可能である。しかし、地区内から供給される原木は現実には地区内だけでなく他地区にも供給はされており、そのために県内の各地区とも地区内で自給できない状況にある。例えば、北上、一関の地区のように著しく供給量が不足している地

表-1 製材用素材の需要の推移

	昭 4 0 年			昭 4 5 年				昭 5 0 年			
	総 数	国産材	国 産 針 葉 樹	総 数	国産材	国 産 針 葉 樹	外 材 増 加 率	総 数	国産材	国 産 針 葉 樹	外 材 増 加 率
	百 m <sup>3</sup>	%	%	百 m <sup>3</sup>	%	%	%	百 m <sup>3</sup>	%	%	%
盛 岡	2,498	92.3	66.6	2,487	79.8	60.1	12.5	2,243	67.9	45.5	11.9
花 巻	899	96.0	62.3	791	89.7	56.8	6.3	810	65.8	33.0	23.9
北 上	839	97.0	63.1	951	91.1	42.0	5.9	1,135	50.7	23.3	40.4
水 沢	431	100.0	93.1	437	78.9	74.9	21.1	435	64.8	47.6	14.1
江 刺	119	100.0	85.4	139	79.9	74.8	20.1	142	57.0	50.7	22.9
一 関	414	98.6	73.2	333	79.9	72.7	18.7	270	47.8	45.2	32.1
千 厩	662	100.0	94.8	865	77.2	74.0	22.8	724	83.1	80.8	△ 5.9
大船渡	976	99.6	86.2	1,423	61.8	58.6	37.8	1,361	52.0	50.8	9.8
遠 野	1,103	96.0	70.2	1,189	94.0	67.7	2.0	1,085	77.0	60.7	17.0
宮 古	2,113	90.2	34.8	2,590	73.9	28.6	16.3	2,607	59.0	26.7	14.9
二 戸	1,157	93.8	61.6	1,879	85.5	59.1	8.3	1,495	84.5	57.8	1.0
久 慈	1,033	98.7	47.8	926	90.1	39.3	8.6	951	63.7	28.1	26.4
県全体	12,243	95.1	63.2	14,061	80.4	53.4	14.7	13,770	65.4	43.1	15.0

資料：岩手県林業動向年報（36,46,51年版）

注：外材増加率とは { 45年(または50年)の外材比率 } - { 40年(または45年)の外材比率 }

区でさえも地区内からの供給量のうち地区内に供給される量の比率は80%余であり、他の20%近くが地区外に供給されている。このことは地区内の需給が極度のひっ迫状態にあっても地区外に供給され、地区間の原木交流が行われていることを示している。

このような地区間交流量の地区内からの供給量にしめる比率は供給量が相対的に過剰な水沢地区をのぞいては各地区とも30%以内である。逆にみれば、地区内からの供給量の70%以上は地区内に

表-2 製材用国産原木の地区内における需給

地区		盛 岡	花 巻	北 上	水 沢	一 関	大船渡	遠 野	宮 古	岩 泉	二 戸	久 慈
実 数 (県全体 を100.0 とした数 値)	①地区内で 自給した量	19.2	7.3	3.6	2.6	3.8	5.7	7.0	8.0	4.9	5.7	6.2
	②地区外へ 供給した量	4.9	1.7	0.8	2.9	0.9	1.5	2.5	1.2	0.4	1.2	1.2
	③地区外か らの需要量	6.0	1.9	3.6	1.4	3.8	0.8	2.0	2.0	1.9	1.6	1.0
	④供給料 ①+②	24.1	9.0	4.4	5.5	4.7	7.2	9.5	9.2	5.3	6.9	7.4
	⑤需要量 ①+③	25.2	9.2	7.2	4.0	7.6	6.5	9.0	10.0	6.8	7.3	7.2
比 率 (%)	自給可能率 ④/⑤	96	98	61	138	62	111	106	92	78	95	103
	地区内供給 率 ①/④	80	81	82	47	81	79	74	87	92	83	84
	地区内自給 率 ①/⑤	76	79	50	65	50	88	78	80	72	78	86

供給されていることになる。

以上のような地区内における国産原木供給の結果、各地区別の地区内自給率（「地区内から地区内に供給した量」÷「地区内需要量」）が70%未満の地区は北上、一関、水沢、70～80%の地区は岩泉、盛岡、二戸、遠野、花巻、80%以上の地区は宮古、久慈、大船渡となっている。

### (3) 国産原木の地区間交流

地区内で原木需要が極度にひっ迫していても地区外に原木供給が行われている現状をみたが、この地区間の原木交流が行われている要因は地区内の需要側と供給側の間で需給の時期、品質、数量、価格等の商取引の条件が合致しないことにある。原木購入量が製品販売価格の主要をしめる製材加工においては品質が良くて安い原木を計画的に購入できることが企業間競争の重要な条件である。従って、輸送コストが最も低くなる地区内において取引が最も多くなるのである。しかし、地区間の取引が行われているのは地区内の両者の取引条件が一致しないことや地区の周辺部においては地区内と取引するよりも地区外と行うことによってより有利な条件が得られることがあるからである。

以上のことから、ある原木需要地区に対する供給地区は供給量の大小によって基幹地区、補完地区、限界地区に分けられる。実態的には基幹地区は需要地区であり、補完地区は需要地区に隣接する地区であることが多く、限界地区はさらに遠隔の地区である。このように区分した場合の国産原木の地区間交流の状況は表－3に示されるとおりである。

表－3 製材用国産原木の地区間交流

供給地区 需要地区	基幹地区	補 完 地 区	限 界 地 区
盛 岡	盛 岡(76)	青森(10), 二戸(4)	花巻(2), 宮古(2), 北上(1), 遠野(1)
花 巻	花 巻(79)	遠野(7), 盛岡(5), 水沢(4)	一関(2), 北上(1)
北 上	北 上(50)	水沢(19), 花巻(8), 遠野(7), 盛岡(7)	秋田(3), 一関・大船渡・盛岡(1)
水 沢	水 沢(65)	盛岡(18), 北上(10), 一関(5)	花巻(2)
一 関	一 関(50)	盛岡(16), 宮城県(17), 水沢(9)	花巻(3), 大船渡(3), 遠野(1)
大 船 渡	大船渡(88)	遠野(5), 盛岡(5)	水沢(1), 宮城県(1)
遠 野	遠 野(78)	大船渡(7), 盛岡(6), 一関(4)	花巻(2), 水沢(1)
宮 古	宮 古(80)	遠野(7), 大船渡(6)	岩泉(3), 青森県(3), 久慈(1)
岩 泉	岩 泉(72)	久慈(13), 宮古(5), 盛岡(5)	
二 戸	二 戸(78)	秋田県(14), 青森県(5)	盛岡(3)
久 慈	久 慈(86)	青森県(7), 宮古(4)	二戸(1), 盛岡(1)

(注) ( ) 数字は地区の需要量に対する各地区の供給量 (%)

原木供給における補完地区、限界地区の比重は木材市場の外材化に伴い一層高まるものとみられる。それは国産材製材工場は工場経営の体質にあった原木確保を志向しつつあって、道路網の発達

によって遠距離の地区からも原木の需要が行われてきていることから明らかである。

#### 4 文 献

- 1) 岩手県林業試験場研究報告, 第 2 号, P 29 ~ 31, (1978). 佐々木孝昭: 岩手県森林組合連合会  
共販の現状と問題点
- 2) 木材産業と流通再編, P 46 ~ 127, 日本林業調査会(1976). 岡村明達 編著